



べんきますめちのドラゴククエスト

べんきます

がいでんプラス

11よるべえちへん

便女



昭和最終戦線

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

これまでのあらずじ

ルイータの酒場で仲間を探したゆーしやちゃんことユリシア
屈強な男三人を紹介され、さあ魔王退治だ！と意気込むも
街を出てすぐに男たちにレイプされるのだった

「俺ちよつどトイレ〜」

男の二人がそう言うのと、街道の端の木陰に
ユリシアを引き連れて行く。

有無を言わずしやがませると、男は彼女の
口にその剛直を突き立てる。

「やっぱトイレは女の子の口に限るわ〜」

「美少女ならなお良しってなw」

涙目で受け入れるユリシアのことなど全く
お構いなしに男たちはゲラゲラと笑い合う。

「よし！全部飲みよ！」

男がユリシアの口の中へ射精する。

全部飲むも何も、彼らは彼女の嚙下を確認するまで
抜くことはない。ユリシアは文字通り必死に飲み込ま
なければならなかった。

「あれ？ゆーしやちゃんどうしたの？」

「はやく立ち上がりなよ」

男がことを済ませるも、彼女は立ち上がれずに居た。
尿意を催したが、それを口に出すのは憚られたのだ。

「あーゆーしやちゃんもトイレかな？凶星だなw」
男たちに見破られると、彼女は途端に恥ずかしさに
目を逸らしてしまった。

当然のように男たちは目の前で排泄を済ませることを要求する。

先程まで背にしていた樹に手をつき、しゃがんだまま男たちの方に尻を軽く突き出す。涙目になりながらもそのまま排尿をする。

「おっ人が通るぜ」

街道の傍ら、ものの数メートルの距離だ。

こんなところで用を足しては間違いなく見られてしまうだろう。

通りかかる人が来る前に済ませてしまおうと彼女は二層イキんだ。しかしそれがいけなかった。



「せっかくだからおすそ分け、あつちの人にも見てもらおうぜw」
男は笑いながらユリシアを抱え上げて街道の方へと向き直る。
イキんだことと、持ち上げられた衝撃で、アナルから勢い良く、
茶褐色のものが飛び出してしまった。
「やつ、いやつ!!!みないでえ!!!」
少女の叫びも虚しく尿も便も止められる様子もなく、一部始終を
名も知らない旅人たちに見られてしまうのだった。





「毎夜、(どこるか休憩の度) ユリシアは男たちに犯されていたが、とりわけ遅れることもなく、一行はアリアハンの北の街、レーベにたどり着く。」

アリアハン以来の大きな街にユリシアはあたふたと周りを見回すだけだったが、男たちは宿を見つけると手早く部屋を取り、何やら商売の算段をつけているようだった。(旅人の殆どは魔物の角や骨、街の特産物などを運んでいるものだ)。

男たちの手際の良さにユリシアが感心しているのと、不意に男たちに手招きされ話の場に加わるようになった。



日も暮れがかり、街は徐々に夜の様相を呈す。ユリシアはまるでサイズの合わないパニースーツを着せられていた。反論をする間もろくにないまま、酒場の中に放り出される。「こちらのウサギちゃん、一回20Gで穴どれでも使っていいよ」男が酒場の客に宣言すると、無数の目が彼女を取り囲む。なんとか逃れようと尻や胸を隠そうにも、年齢には不相応なまでに育った身体ではそれもままならなかった。

そうこうしている内に、太った男が彼女を買おうと踏み出してきた。

彼女があたふたと戸惑っていると――。「ちよっとは乱暴にしてもいいですよw

なにしろ丈夫なイイコですから♪」などと男から声がかけられる。太った男はそれを聞くとニヤニヤと笑みを浮かべながらユリシアに迫る。

本能的に逃げようとした彼女をどんと突き飛ばすと、男は後ろから行為に及ぶのだった。

「へへっいい具合じゃねーか！これで20Gなら安いもんだね」衆人環視のもと、どすどすと無遠慮に腰を打ち付ける。宙ぶらりんになったユリシアの胸がそれに合わせてゆさゆさと大きく揺れる。声を出すまいと彼女が耐えている内に、会計を務めている男の前には十人を越える行列ができてきた。



途中からは二人、三人と同時にハメられたりはしたものの、段々と人は増え行列がすべて消化される頃には空も白み始めていた。「毎度ありくしばらくレーベで商売させてますからよかったですねw」

ユリシアに全く配慮のないどこか間の抜けた男たちの声も、疲労で意識が定かではない彼女には聞こえていないのだった。



「い、一体昨晚のはなんなんですか!」
目覚めた彼女は当然男たちに抗議した。
あんなことをさせられるとは全く聞いていなかったからだ。

「そうは言うけどさゆーしやちやくん」
男たちにも反論はあった。
ユリシアほど外見(と身体)に恵まれているならば、こうして路銀を稼ぐのが一番はやい方策なのだ。
この大陸に長くともまる理由もない、パラモスを倒すためにも早くロマリアへ渡りたいのは男たちもユリシアも同じだ。
「俺らも出来る限り協力するからさあまあちよつとの間辛抱してよ」

そう言われると強くは言い返せない。
渋々ではあるが、彼女は数日に渡ってレーベの街で春を売ることに承諾した。





ロマリアへの道はいざないの洞窟と呼ばれる、旅の扉を湛える洞窟を越える必要がある。

その中には魔物が蔓延り、抜けるにはそれなりの腕前が求められる。

ユリシアは見た目に似合わず、剣も魔法も達人と呼ばれる者を遙かに越える実力の持ち主である。

一方、男たちも魔法こそ全く使えないし、十分以上の実力と臂力を備えていたし、旅慣れていてダンジョンの中の振る舞いも玄人と云えた。

そんな四人にとってはこの洞窟を越えることは容易く、大した苦労もなく旅の扉を抜けて、ロマリアへとたどり着いた。

「これでお金たまりましたよね！
さあロマリアへ行きましょう!!」

「お〜」

声高く宣言する彼女の服が以前と違うのは路銀のために売った…わけではなく、単純に下取りに出したのである(と、男たちは言っていた)。



ユリシアという少女は、●六歳としては…どころか人間としても類稀な武芸・魔術の才を備えている。

しかし、世俗のことにはまるで疎い。男たちに手を引かれ訪れたこの館も、宿ではないことはわかるものの、一体なんのために来たのか理解していなかった。



昼間だと言うのにまるで開く気配のない正面の扉を通り過ぎ、手狭な裏口らしい扉を開く。

「よく来てくれたわね。私がこの責任者よ」
煙管をくゆらせつつそう口を開いた美女は、女性としては長身で、ユリシア以上に豊満な胸をしていた。

その場に居合わせた人間の中で、ユリシアだけが事態を飲み込めずにいると、柔和な表情で責任者を名乗った女が説明を始めた。

ここは所謂娼館であり、ユリシアはしばらくここで働いてもらうというところで既に話がついているということ。

冒険者の女性がこういったところで一時的に働くことは珍しいことではなく、歓迎すると言った。

「ゆーしやちゃんがここで働いてる間、俺達は魔物退治で金策したり、バラモスについて情報集めておくからさ
ここは信用できる店だから安心して働いてくれよ!!」

普段とは違う男達の態度は少し気になったが、ユリシアは提案を承諾をした。彼女はどうにも流されやすい。

女は眉をひそめ、男たちはニヤついていたが、先行きに悩む少女がそれに気づくことはなかった。



「いらっしやいませお客様

今日はどうぞごゆっくりお楽しみ下さい」

そう言うのと彼女は深く深く頭を下げる。土下座で客を出迎えるのがこの店の流儀だと教えられ、ユリシアはその通りにした。

待合室はエントランスから見える形になっており、客はその中から番号や、知っているならば名前前で女を選ぶ。呼ばれた女は客を連れて割り当てられた部屋へ向かい。そこでことに至る。

娼館で働く女性は様々で、容姿や必要な金、もしくは性癖によって可能とされる行為はいくつか異なる。

ユリシアのような冒険者は、なるべく短い期間で仕事を終えたいという事情があるので、その土地に住む者たちよりも激しい行為を受け入れる者が多い。

そういったところに魅力を感じて冒険者に絞って娼館に足を運ぶ客というのも案外珍しくはないのだ。そんな事情が助けたのはわからないが、彼女にはすぐに客がついた。



「ゆーしやちゃんだっけ？」

小さいのにケツの叩きがいはあるねえ、まんこの締めもいい感じだ♪」

「あっ、ありがとうございますっ！」

半ばなじるようなことを言われても、感謝の言葉を返すようにと予め教わったユリシアは、その通りにした。

同行している男たちに犯された時も、レーベで仕事をさせられた時も、

複数の人の視線に晒されていた彼女にとって、一人の男と密室で行為に

及ぶというのは、実は初めての体験だった。

彼女を買った男はまるで遠慮なく腰を打ち付け、少女を詰っていたが、

それでもユリシアは初めて性行為に快感を覚えていた。

「こんな酷いセックスで気持ちよくなるなんて、やっぱり冒険者の女の子

って変態ばっかなんだね♪」

ま、僕は変態な女の子大好きだからいいけど」



「ふんっ!!…さっきベルを鳴らされたし、これで打ち止めかな」
部屋のベルが鳴らされたら、それが終わりの合図である。
結局男はユリシアに五回中出しをした。

「それじゃゆるしやちゃん、最後にこういうのやってくれる？」
耳打ちにユリシアは頬を染めるが、急かされると渋々、男の
眼前で尻を高く掲げ、お腹に力を入れる。

「あ、僕はお客様なんだから、きちんと笑顔でね」
ユリシアがぎこちなく笑顔を浮かべると、彼女の性器から
「フビツ」と間抜けな音をたてて中出しされた精液が垂れた。

「きよ…今日はわたしのおまんこ…っ…いっぱい使ってくれて
ありがとうございます…またのお越しをお待ちしてます」
彼女の下品な言葉に客の男は満足したようで、手を叩いて
ゲラゲラと笑っていた。



ユリシアが娼館で働きはじめて半月ほどが経った。
彼女の人気は上々だった。あの見た目に体型だ。拙い
部分はあるが、少女然としたルックスと相まってプラス
になっていると言える。

娼館の部屋の殆どは少人数用だが、集団で使う部屋も
わずかばかりある。今日はその部屋を利用する傭兵団が
来店するのだ。一体誰に荒くれたたちの相手をさせるのか、
店長である女性はそれに頭を悩ませていた。

「うーん…やはりあの娘かしらね…」
連中の行為は普段の客に比べれば乱暴だ。彼らの相手
をしてダメになってしまう娘も少なくはない。
しかし金払いはいいし、大口の客だ。上からも丁重に
もてなすように伝えられている。

元は自分も同じ仕事をしていただけに「彼らの相手を
させることに気乗りはしない」
だが、彼女の希望であるなるべく短い期間で金を稼ぐ
という条件にこの仕事は合致する。

ため息をつく、彼女は重い腰を上げた。
スタッフに指示を伝えると、傭兵団の出迎えのために
エントランスへ向かうことにした。

「へっ来てやったぜ」
新しい娘はいるかい？
彼女にとっては既に聞き慣れた下品な笑いがしていた。



「違う…乱暴されて…
気持ちよくなってる…」

「しかし彼女が度々達していたのは
事実だった。それがセックスによる
ものかい暴力によるものか、言葉に
よるものなのかはわからないが。」

店長の女性は今回の仕事には特別
に報酬を出すと言っていた。
ひよっとしたらこれで娼婦として
の仕事も最後にできるかもしれない。
彼女はそんなことを考えることで、
この時間をやり過ごしていた。

「おら!!もつとちやん締めろ!
締めないとこつちが首絞めちまうぞ!」
「おいおい殺したら出禁だぞ、程々にしろよw」

傭兵団の屈強な男たちは、ユリシアを取り囲み休みなく
犯し続けている。
広い部屋には数人の娼婦と二十人近い傭兵の男達があり、
ユリシアはその中央で最も多くの男を相手している。
少女らしい、愛らしい顔立ちに女性的な肉体はやはり男
たちの興奮を煽る。穴という穴に肉棒が次々に殺到する。
その苛烈さと言えば普段の行為の比ではなく、最早暴力
と言って差し支えないものだ。娼婦の内何人かは途中で
失神してしまい、その都度男たちは無理やり起こしている。

とりわけ頑健なユリシアへの責めは中でも激しいものだった。
首を絞めながらセックスをする、イラマチオしながら鼻をつままれる、
セックスをしながら腹を殴られる。
その理不尽さに少しでも抵抗しようものなら、頬を叩かれ、生意気だ
と土下座を強要される。頭を踏まれる。

普段なら彼女らの仕事は長くても精々三時間程度で終わるが、傭兵団
の連中は一昼夜以上この部屋を使っている。ユリシア以外は何度か人が
入れ替わったが、男たちはよほど彼女を気に入ったのか部屋から出そう
とはしなかった。

「はん、嫌がつてるふりしてもよお、わざわざこんなところで働いてる
売女だろ?乱暴にされてさぞ嬉しかろうよ」
拳や肉棒だけでなく、男たちは言葉でも彼女を辱めた。

「ふーやったやった」
「最後の最後に気い失ったか」
「ぶっ壊れるかと思っただけど、結構元気
なままだったなw」
「イカれ女抱いても面白くねえもんなw」
「全くだ」

「じゃーなゆるしやちゃん」
「次：はねえか、多分」

傭兵団相手の仕事の翌日、ユリシアには休みが与えられた。

寝所で、手持ち無沙汰にしていると、不意にスタッフに呼び出された。

彼女の仲間が訪れたらしい。

「(よかった。これでやつと旅が再開できるんだ...)」
安堵のため息をつき、彼女は寝所を後にする...

「いやあごめん、あり金全部なくなっちゃまってさ、穴埋めにこの人達に
ゆーしやちゃんを売ることにしたわw」

男の口からは信じられない言葉が発せられた。

「え？売る...？え？旅は...旅はどうなるんですか!!」

彼女が詰め寄ると、男は面倒そうな顔をして目をそらす。

そもそも彼らは魔王退治など大話としてまるで信じていなかった。

彼女を利用してロマリアで遊ぼうと考えて彼女に同行していたのだ。

所持金が尽きたのも全くの出鱈目で、単に今までユリシアの良い買い手を
探していただけだったのだ。

ユリシアは怒り、男を非難した。しかし、その言葉はその場の誰一人
として真面目に聞いては居なかった。

買い手と紹介された男が身振り指し示すと、後ろに控えていた大柄

な男が、二歩前に踏み出した。腕を振りかぶる。

構える間もなく彼女の腹部に拳を突き刺さる。

激しい痛みと嘔吐感に襲われながら、ユリシアは気を失った。



どれほど気を失ったのか、ユリシアが目覚めたのは
見覚えのない、簡素なステージの上だった。
ステージの周りには客席がありどうやら彼女は見世物として
立たされているようだった。
衣服は剥がれ、腕は頭上で拘束されている。そして周囲には
通常のものより大型の、ホイミスライムの亜種と思しき魔物が
彼女を取り囲んでいた。



「一体これは...!？」

状況はわからないが、どうやら魔物は彼女を襲おうとしている。
ユリシアにとっては武器があれば数瞬あれば片付く相手だが、
当然武器になるものはない。

「それなら...っ」

と、魔法を発動させようとしたがそれも叶わない。どうやら何
かしらの手段で魔法も封じられてしまったようだった。

「うっ...来ないで!! 寄らないで下さい!!」

抵抗の手段が奪われてしまった彼女にとっては、その叫び声を

あげる事が精一杯の抵抗だった。

にじり寄る触手の前に、彼女が研鑽を積んだ日々は全く意味を

成そうとはしなかった。



僅かばかりの抵抗も虚しく、脚を開かれ宙吊りにされる。無防備になった穴には触手が殺到する。悲鳴を上げようとした口にも触手がねじ込まれ、粘ついた声のような何かが漏れていた。

胃をまさぐられ、子宮の壁を殴られる。そうして少女は数時間に渡り罵られた。気を失った彼女の尻から触手がすべて引き抜かれると、茶褐色の排泄物が音をたててステージ上に落ちていった。彼女を見つめる観客たちから、改めて歓声と嘲笑が上がった。

再び目が覚めたユリシアが居たのは、さながら独居房と言った体の部屋だった。とは言え食事は暖かく、ベットも固いがシートは清潔なものだ。虜囚という程悪い扱いを受けているわけではなさそうだった。

鉄格子の先には同じような部屋があり、そこには長く綺麗な水色の髪、オレンジのタイツに豊満な身体を押し込めた女性が居た。

ユリシアはあたりを見回し看守らしい男がいないことを確認してから、彼女に話しかけた。

「ここは一体なんなんでしょう？」

「新しく来た人ですか？…そうですね…」

「そう言うと彼女はここがなんなのか、わかる範囲でユリシアに語った。」

「ここでは連れ去られた来たり、売られた女性が魔物と戦わされたり、性行為を強要されている。魔物に孕まされれば、それもまた、集めた観客の前で出産させられる。そんな場所だということ。」

ユリシアに取ってその情報は、ある程度は想像のついたものだった。当然、こんなところに居てはパラモスどころではない、なんとかして脱走する機会を見つけない必要がある。

「ああ！それとここに連れてこられた女の子は——」



深夜に体調不良を装い、看守を部屋に呼び込む人間二人であれば徒手空拳でも対処は容易い。手早く看守の気を失わせ、ユリシアは脱走した。

魔物とまぐわう事自体は苦痛だが、ユリシアには耐えられないわけではない。もっと都合のいい機会を伺って脱走するべきだと思っただが、ついさっき、水色の髪の女性の言葉が、出来る限り早くここから逃げるべきと判断したのだ。

「ここに連れてこられた女の子は、身体をいじられるんです。胸を大きくされたり、男性の方のモノをつけさせられたり……」

身体を改造されて、戦えなくなっただけは本当に魔王退治どころではない。捕まっているだけでも身体がなまってしまうのに、そうやってしまっただけから一体どうして生きていけば良いのか、ユリシアにはわからなかった。

人を避け迷宮のような建物の中を駆け抜けていく勘を頼りに彼女がたどり着いた先は開けた闘技場のような場所だった。人は居ないが、巨大な魔物トルルが目を見光らせていた。ユリシアは意を決し、先の扉を目指し地面を蹴った。

ユリシアの武器は短剣二つだ。魔法は相変わらず封じられている。彼女はトルルの横を抜けて、戦闘は避けるつもりだった。短剣を顔に投げつけ、一瞬ひるんだトルルの脇を素早く駆け抜ける。容易く裏をとった彼女は振り返ることなく扉へと向かい手をかける。

しかし扉には鍵がかかっている。いくら音を立てても開く気配はない。彼女がそれに焦ったのも数秒の話だ。トルルは後ろからユリシアを掴み上げると、狙いを定めて股間の巨大なそれを少女に突き立てた。一突きで肺の空気が押し出され、声にならない悲鳴が食いしばった歯から漏れ出した。

朝が来て、他の人間たちがやってくることで漸くトルルとユリシアの行為は終わりを迎えた。駆けつけた男たちは失神した彼女が死んでいると思ったが、驚くべきことにユリシアは生きていた。

普通の人間はトルルとのセックスなど耐えられたものではない。類稀な頑健さが彼女の命を繋いでいた。

……しかし、それは必ずしも幸運であるとは言えなかった。目覚めた彼女は、昨日の独居房へ戻ることはなく、また知らない部屋で目を覚ますことになる……

「様子はどうか？」
「健康状態はいいですよ。
ただ今回はダメみたいですね、無理やり
卵は産ませて、次何を仕込むかはこれから
会議です」

地下深く、会話の主たちが見つめる先には
魔物との交尾によって腹を膨らませた少女が
居た。少女の名はユリシア、かつては魔王を
討つために旅をしていた。

「さっさと出せ！次が仕込めないだろ!!」
妊娠によって大きくなった腹に、固い靴裏
がめり込む。ぬらりと光る卵が彼女の女性器
から、間抜けな音と立てて飛び出した。

トロルとの行為の後、彼女はその常識はずれな
頑丈さに目をつけられ、地下深くへと移送された。
魔物の子を孕みやすくなるように身体を弄られ、
四六時中多様な魔物との交尾をさせられる。
時折、ショーのようなことをするものの、生活
の大部分は地下で過ごした。

彼女の身体を使って、より強力な魔物を作ろう
としている。それらしいことはユリシア自身にも
漏れてくる会話から推測がついた。
しかし数カ月の時を経て、彼女の抵抗の意思も
すっかり萎えてしまっていた。旅は終わったのだ。

最早少女が知ることはないが、この試みは
魔王へ反旗を翻そうとする一部の魔物たちが、
人間と結託し強力な兵隊を用意しようとする
計画の一端である。

図らずもユリシアは魔王を討つために力を
貸していることになったが、それもまた彼女
が知る由はない。
心が朽ち、身体が破壊されるまで、ここで
望まぬ子を生み続けるのが彼女の人生の全て
である。

BAD END

旅立ち前

一年後



ユリシア

ゆうしやオルテガのむすめ

さい

じょうたい：しょじょ



081ごう

まもののなえどこ

さい

しゅっせんすう：15

そういえばさー
姉妹は俺らと会うまでは
どんな感じで旅してたん？

旅二人ガキメのしなの

そーねえ…
初めての旅だったし
すぐお金がなくなっってね
それで困ってたら商隊の人が
護衛やらせてくれるってことで
ついてったんだけど

目的地までの毎日
しこたま犯されたわね
レイプよレイプ

おらクソガキ!!
マンコ締めずに金もらえろ!!
思っでんじゃねえぞ!!
しっかり締める!!

おいブス!!
ぎゃんぎゃん喚くな
うるせーんだよ!!

クソガキ!!

おらクソガキ!!

おらクソガキ!!

おらクソガキ!!

私達のガキマンコ…
いっぱい使ってください
ありがとうございます…
明日もよろしくお願いします…

まだまだ頭が高いんだよ!!
地面にちゅーするんだよ!!

そこでメスとしての作法を
躰けられたわね
チンポには逆らうなって

ほーそれは良かったな

辛い人売りみたいなのは会わなかったから
マンコで路銀稼いであんた探して転々として…
それでホームラの里の風呂で乱交してたら
魔物に捕まったってわけ

あの時はヤバかったわねー

あーセーニヤとか魔物に
めちやくちやラれたもんなら
もう少し遅かったらダメだったかもな

いっ…イレブン様あつ…



お願いしますっ…♡
イレブンさまあつ♡はやく
おちんぽお恵み下さいっ♡

えーさつきヤツたし
まだ子宮抜けたままじゃん
もうちよつとそこで踊ってよ

あんたほんと鬼畜よね
そこがいいとこだらうけど

だってセーニヤみたいなのマゾアタ女
ならこういふ扱いのほうか悦ぶでしょ？
あつほらまたイッてる！





水あび中

ふふ、イレブンよ
良いことを教えてやろう

あーマルティナえらい...
セックスしたい...



美人な彼女はモゾブタ女

あれは3年前の話じゃ
マルティナがまだ未熟だった頃
ある盗賊たちにさらわれてしまったのじゃ



アッ!

アッ!

オラァ!!
キマキマッ
レムハヤ!!

無論わしも助けに向かったが
たどり着く頃には既にことが
はじまっておった

輪姦される様子を見ながらせつかくだし
爺が自慰に励んでおったのじゃが…
そこですこいことが判明したのじゃ

完全に悦んでおる…!!
マルティナは生来のマゾヒストじゃ…!!

このクソアママ!!俺らの商売を
邪魔しやがって!!マンコで反省しろ!!



その後も外から様子を伺っておったが盗賊たちが満足し、マルティナが失神するまでの間に幾度となくイッておった…かなりの素質じゃ

助けなかったのかよ
ひでえな爺

お仕置きのはずが随分悦ばせちまったが…
いいか女、また邪魔したら今度はもっと
ひでえ目に遭わせてやるからな!!

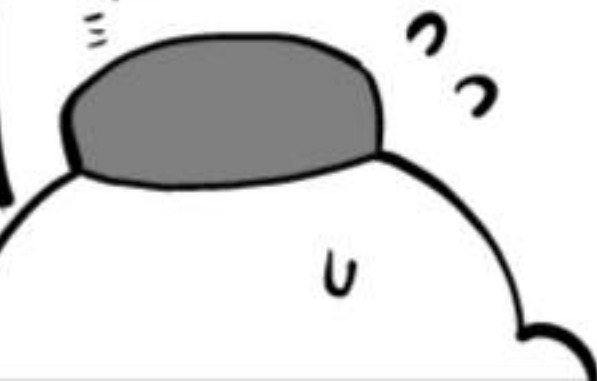
親分、そんなご褒美上げたらこの女
また邪魔しに来ますよ〜W
まあ氣い失ってるし聞こえてないでしょうけど

まあなに結果的に危害を加えられた
わけでもあるまい?
とにかくレイプするなら協力してやろう
わしにもヤラせろよイレブン

おまへもなまめだ



いせしや
ふがひなはが



…まあ、物は試した
せつかくだしレイプしてみるか



いせしや
ふがひなはが
いせしや

ふーできたできた…
賢者モードになった後にここまでやるのは
大変だった…よしそれじゃ一日放置しとくか

わしが言うのも何じやが
イレブンお前も鬼畜な奴じやな…

女便

へへっ褒めるなよ爺さん♪

私マルチメディアのジャパン
さまのイキまの神様様
ニニバタサバカ。

その頃許嫁の前の娘は



は〜マンソフタ女たちも
いいけど
エマとヤリてえ〜
今頃どうしてっかな〜
ハメてえ〜

ある城の地下牢獄

エ〜マちゃん♪
御飯の時間だぞ〜



After ← Before

